

[掲載紙] 読売新聞「レンゲツツジ」

[掲載日] 2015年4月12日

[テーマ] 館林に根差す「食」の力

4月8日、館林商工会議所のご招待で、当地の経済、行政、政治各界の関係者らによる懇談会に参加させていただいた。折悪^あしく、花冷えの厳しい中ではあったが、地元関係者の方々と交わす議論は熱気に満ちあふれ、当地の活力を実感できる良い機会となった。

県内各地で経済情勢に関する意見交換をさせていただくが、地域によって関係者の多い業種が異なる点は面白い。同じ群馬県でも実に多様である。館林市での会合では、食料品製造業の関係者が多いことに驚いた。

館林市は、県内で最も早く、高速道路網による東京との時間距離が縮まった地域である。東北自動車道によって東京方面と結ばれたのが1972年。関越自動車道の延長で高崎市が東京方面とつながるよりも8年ほど早い。

これが、首都圏への食料品供給拠点としての館林市の魅力を県内の他地域に先行して高めた要因になったことは間違いないであろう。

経済産業省が最近公表した「群馬県の地域経済分析」では、「館林経済圏」（館林市、板倉町、明和町）の産業特性の一つとして食料品製造業の産業集積を挙げている。

群馬県の工業統計調査（2013年）を基に日本銀行前橋支店で分析したところ、館林市の食料品出荷額シェアは、高崎市、前橋市に次ぐ3位であり、事業所当たり出荷額で見ると県内では突出して大きい。食料品関連の規模の大きな企業が集中しているのである。

産業集積度が高まると企業の生産性も高まることが多くの研究によって知られている。知識や技術の交流、労働力確保の容易化、取引費用の節約といったものが企業のパフォーマンス向上をもたらす要因になる。

地方創生の推進にあたっては、地域における選択と集中、地域の特性を活かした産業の活性化といったメリハリのある施策が何よりも重要だ。既に関係者の方々は様々な検討をされているだろうが、館林経済圏にとって、食料品製造業の分野で産業集積度を更に上げていくということは有力な案になっていくのかもしれない。

「麺 - 1 グランプリ in 館林」や「激辛・激甘・激冷グルメ総選挙」など、館林市で開催されている人気イベントも食に関連するものが少なくない。

食料品製造業での集積と飲食・観光といった関連分野との連携。これまで進めてきた戦略は着実に成果を上げている。そうした取り組みがさらに発展していくことを願っている。

〔 日本銀行前橋支店長
富田 淳 〕